

Ruth 再読

—— ユニテリアニズムを切り口にして

小 柳 康 子

はじめに

Elizabeth Gaskell の人生と彼女の小説をユニテリアニズムを切り口にして考えるには幾つかの方法があるが、とりわけ、アメリカ独立戦争とフランス革命に影響されて社会改革を訴えた 18 世紀のリベラルな思想家や文学者の多くがユニテリアンであったことに着目し、ギャスケルを彼らと比較してみることに意味があると思われる。ギャスケルをヴィクトリア時代の社会小説家、女性小説家としてだけではなく、イギリス文学史の中に存在する女性擁護のテキストを書いた女性たちとの連続性の中に置いて考察することが可能になるからである。本稿はこれを考えるための手がかりとして『ルース』を取り上げ、この小説のテーマのひとつである「看護と転落した女性の救済」の問題を、宗教的情熱に支えられたヴィクトリア時代の看護改革との関わりの中に据え、ギャスケルを 18 世紀ユニテリアン改革者の系譜の中で再考しようとする試みである。

I

三位一体の教義を否定しその根本に神の単一性を置くユニテリアニズムの起源は、3 世紀半ばから 4 世紀にかけてアレクサンドリアの司祭であった Arian の唱えた教理、アリウス主義 (Arianism) に類似しているが、近代ユニテリアニズムは、16 世紀に生きたハンガリーの Francis David、スペインの Michael Servetus、イタリアの Faustus Socinus にさかのぼるとされている。¹ カルヴィニストの牧

師ダヴィッドとセルヴェトゥスは聖書を徹底的に研究し、神とキリストと聖霊が神の三位格であるとする三位一体の教義は聖書の中にその根拠を持たないことを主張した。William Harvey よりも早くに血液循環説を唱えた医師でもあったセルヴェトゥスは、三位一体を一種の多神教として否定し、イエスは神の養子となった完全なる人間であると説いたために異端審問所の追及を受け、ジュネーヴでカルヴァンにより異端として告発され火刑に処されている。

この2人の先駆者にもまして近代ユニテリアニズムを生み出す原動力となったといわれている人物がシエナに生まれたファウストス・ソツィーニである。これはユニテリアニズムとユニテリアンがしばしば、ソツィーニ主義 (Socinianism)、ソツィーニ主義者 (Socinians) と彼の名前を冠した呼び名で表されるところにも示されている。イタリアの人文主義者の影響を受けて自由主義的な精神を有していたソツィーニは、スイスのバーゼルや、はじめて「ユニテリアン」という語が使用された土地であるトランスシルヴァニアに短期間滞在した後、ポーランドに移住して自分の理想とする教会を組織するために精力的に活動した。彼は唯一神が三つの位格として正しく語られることはありえないとただけではなく、イエスの死ではなく復活と昇天を強調し、神は死の支配を免れなかったイエスを神的な力に引き上げ、それによって被造物に対する愛を完全にしたと主張した人物である。ソツィーニによってキリストは、預言者と祭司を兼ねた真の人間として神についての知識をもたらし、神のもとに行く道を示すためにこの世に存在した人間であるとされたのである。

イギリスにおけるユニテリアニズムはソツィーニの著作を訳した17世紀のJohn Biddleに始まるとされているが、この三位一体否定の教義がCommonwealth時代に同調者を増やし、個人の特異な思想としてではなくイギリス社会の中で一つの勢力となってゆくのは18世紀に入ってからである。その経緯には、17世紀のイギリス革命を導いた宗教的熱狂の時代が終わった後の、新たな政治的、宗教的状况が関わっている。1660年の王政復古後、それまでピューリタンの共和政のもとで圧迫されていた国教会側が、クラレンドン法典と総称される一連の法律や、非国教徒に公職につくことを禁じた「審査法」(Test Act、1673)を制定したが、これらはいうまでもなく、18世紀から19世紀にかけてのイギリス社会に明確に見ることのできる、中心と周辺、つまり、体制派としての国教会と非体制

派としての非国教会の二極化をもたらす基盤となったものであった。とりわけ多くの Nonconformists たちを生み出したのは、聖職者はすべてイギリス国教会の定める共通祈祷書を使用することを定めた 1662 年の「礼拝統一令」(Act of Uniformity) の施行で、これに同意しない聖職者が 2000 人も国教会の外部に追放され、この聖職者たちと彼らに従う信徒たちが国教会体制に組み込まれない国教非信徒者となって、dissenters が形成されていったのである。

クラレンドン法は 1689 年の名誉革命後の宗教「寛容法」(Toleration Act) によって廃止され、名目的には宗教的寛容が実現されたが、これはカトリックとユニテリアンには適用されなかった。自らカトリックであることを明らかにした James II 世を追放して名誉革命を成し遂げたばかりのイギリスがカトリックに対する警戒心を持っていたのは当然のこととしても、三位一体を否定する教義を信奉するユニテリアニズムが除外されたのは、それが異端というよりは無神論と同等の危険思想とみなされていたためだと思われる。ユニテリアニズムが非国教会の一つの宗派としての位置を確立するのは、科学者としても有名な Joseph Priestley による 1770 年代の精力的な著作活動や、国教会牧師であった Theophilus Lindsey が 1774 年に最初にロンドンに教会を建てた以降の 18 世紀後半である。

ヴィクトリア時代の宗教を論じる際に必ず言及される 1851 年の宗教センサスによれば、イングランドとウェールズを合わせた人口が約 1800 万人であった 19 世紀半ばのイギリスにおいて、ユニテリアン信徒の人数は 50,000 人とされていることから、18 世紀における彼らの数はおして知られよう。しかし、啓蒙主義の精神を体現する宗教として啓示や神秘主義や非合理的な教理を排したユニテリアニズムは、18 世紀と 19 世紀のイギリス社会に大きな影響を与えた。それが知的で独立心に富んだ人々を引きつけ、多くの科学者、法律家、医者、教育者、女性作家が生み出されて、近代資本主義社会の更なる発展が彼らによって担われ、それと同時に社会の矛盾を是正しようとする活動も広範囲に展開されていったからである。

II

このように矛盾に満ちた社会を改革しようとしたユニテリアンは、18 世紀末

のイギリスを震撼させ、19世紀にも大きな影響を与えてゆくアメリカ独立とフランス革命に対する共感を示した。曇りのない理性を持つ人間の何物にも侵されない自由と個人主義を尊んだユニテリアンは、イギリスの政治的・経済的従属から脱しようとするアメリカの戦いや、特権階級を廃し、自由と平等に基づく社会を実現させようとするフランス革命に、イギリスとは異なる理想社会を見出し、それが自国においても実現可能だと考えたのである。彼らの社会改革運動の中心は、王政復古体制後に確立した国教会と非国教会とを画然と分ける不平等な法律の廃止を求めるものであったが、それは容易に現体制を転覆させて人民支配を求める急進主義へと転化しうるものでもあった。

この時期のユニテリアニズムと急進主義の結びつきは、リベラルな文学者や思想家たちのまとめ役を果たした、リヴァプール生まれのユニテリアン Joseph Johnson の周辺に集まったジョンソン・サークルと呼ばれているグループに象徴的に示されている。² ジョンソンは William Cowper、William Blake、William Wordsworth などロマン派詩人たちの詩のみならず、科学者 Humphrey Davy の著作や、Benjamin Franklin のエッセイを出版し、急進的な雑誌 *Analytical Review* の編集者でもあった。彼のロンドンの書店には、プリーストリーや Henry Fuseli、William Godwin、Thomas Christie、Thomas Paine などの男性急進主義者だけでなく、Mary Wollstonecraft や Mary Hays や Warrington Accademy の教師で著名な教育者 John Aikin の娘である詩人の Anna Letitia Barbauld も混じって、切迫した時局についての議論を戦わせていた。³

ウルストンクラフトがユニテリアニズムの影響を受け急進思想に染まっていくのは、若い頃 Newington Green に住み、ユニテリアンの牧師 Richard Price と知り合うことを通してであった。ラディカルな聖職者であったプライスは、バスチーユ陥落直後の 1789 年 11 月にいち早くフランス革命を賛美し、イギリスも革命の大義を見習い改革を進める必要があることを説いている。

プライスを通して人間の自由の重要性に目覚めていったウルストンクラフトは、ロンドンでジョンソンの薫陶を受け、ペインやゴドウィンやブレイクなどと知り合うことにより、急進思想をさらに深めてゆく。そして 1792 年には、*A Vindication of the Rights of Woman* を出版し、次の言葉が示すように、理性において男女の差はないとする啓蒙主義的フェミニズムを展開したのである。

Consequently the perfection of our nature and capability of happiness must be estimated by the degree of reason, virtue, and knowledge, that distinguish the individual, and direct the laws which bind society: and that from the exercise of reason, knowledge and virtue naturally flow, is equally undeniable, if mankind be viewed collectively. (91)

後にウルストンクラフトの夫となったゴドウィンと文通をし、様々な問題を論じて合っていたメアリ・ヘイズも、Hackenyのディセンティング・アカデミーで学んだユニテリアンであった。ヘイズは自分の失恋体験を小説に仕立てた *Memoirs of Emma Courtney* (1796) と、男性中心社会の犠牲になる女性の悲惨な姿を描いた *The Victim of Prejudice* (1799) によって「ジャコバン小説」の一翼を担う作家であるが、彼女はこれらのフィクションの他にウルストンクラフトの影響の強い *Appeal to the Men of Great Britain in Behalf of Women* (1798) を書き、女性が男性より劣るという考えを論駁して、女性への偏見を正す教育システムの確立が必要であることを強調した。ヘイズはこのテキストにおいて必ずしも理路整然とした論旨を展開しているとはいいがたいが、女性の従属の誤りを男性たちに訴えかける語調にはウルストンクラフトには見られない迫力が満ちている。

From the first dawning of reason they find a part in life already prescribed for them, which they nearly as early find out to be unequal to their powers and capacities. They find themselves enclosed in a kind of magic circle, out of which they cannot move, but to contempt or destruction. And however confined and mortifying to their feelings this prison of the soul may be, they can never hope for emancipation, but from superior power. In this circle, in this prison therefore, during the reign of youth and beauty they gambol and frisk away life as they best can; happily blind and thoughtless as to futurity. (110-111)

III

『ルース』の主人公ルースは最後に看護婦となるが、この仕事には、1) 自己犠牲的に他人のために尽くす清らかな女性像と、2) 性的に自堕落でわいせつな女性像という相反する2つのイメージが張りついていた。看護が貧しい病人に対する慈愛に満ちた無償のケアを与える修道女の奉仕と密接に結びついていたためであり、また、看護が病み衰えた患者の身体に接触し排泄の世話をする肉体労働であることから、看護婦はメイドと同等であるとみなされていたためでもある。女性を聖女と悪女に切り分ける伝統的女性観を反映したこの二つの像は、ヴィクトリア時代の医療改革によって、看護婦が専門的技術を必要とする職業へと変貌したとき、当然のこととして、その肉体労働としての側面を弱めるために、修道女的な清らかなイメージを強固に押し出してゆくことになる。⁴

ヨーロッパの長い歴史の中で、看護とキリスト教は分かちがたく結びついていた。⁵ イギリスでは14世紀末までに約470の小規模の医療施設があったといわれており、カトリック修道会により創設されたこれらの規模の小さな医療施設では、修道士や修道女たちが無償で病人の看護にあたっていた。これらの病院は16世紀の宗教改革による修道院解散令によって取り壊されたり放置されてしまったために、修道女たちによる看護は16世紀以降イギリスでは見られなくなったが、キリスト教の慈愛の精神と結びついた貧しい病人を癒す看護者像は、イメージとして文化の中に抜きがたく残っていたのである。

18世紀になって philanthropy の思想が広まるとともに、金持ちの遺言や寄付に基づく病院がロンドンや地方都市に建てられ、医療制度も徐々に整備されるようになっていき、性病患者のための「留置病院」(the Lock Hospital)、「産科病院」(the Lying-in Hospital) などの専門病院や施設も作られるようになる。しかし今世紀に入るまで、余裕のある者は自宅で医者にかかることが普通であったため、宗教改革以前の医療施設であっても、それ以降に作られた病院であっても、病院は基本的には貧しい者のための施設であった。従って、篤志家の寄付に頼るこれらの病院の医療的、人的環境は劣悪で、19世紀に入ると学校や刑務所などの改革運動に呼応して、看護の改革運動が起こってくる。1840年にはクエーカーの Elizabeth Fry による「看護修道女会」(the Institution of Nursing Sisters) が

作られたが、これを主に担ったのは 1830 年代のオックスフォード運動の結果生まれた修道女会であった。

イギリスでは 1845 年に「聖十字修道女会」(the sisterhood of the Holy Cross) が創設された後、1900 年までの 55 年間に 90 以上の修道女会が作られ、10,000 人のシスターが活動していたといわれている。⁶ これらの修道女会は看護活動のみを行うものではなかったが、看護をその重要な奉仕活動のひとつとしており、シスター看護婦を病院や個人の家庭に派遣していった。ここに最低の賃金で雇われる肉体労働であった看護が、キリスト教の慈悲と奉仕の精神によって担われる仕事へと変質していく契機があったといえる。シスター看護婦の多くは労働者階級の出身だったが、彼女たちは中流上層階級や上流階級のシスターたちの監督を受け、立派な看護婦であることは他人のために献身する女性であることを身をもって示したために、看護の質が高められていったのである。はじめは大きな病院にシスターを派遣するだけだった修道女会は後に、自分たちの施設に付随する病院も作って主に女性や子供のケアにあたった。なお看護を近代的な職業へと決定的に変える原動力となった Florence Nightingale は、1853 年にパリのカトリックの修道女会「聖愛修道会」(Sisters of Charity) において短期間の訓練を受けている。

IV

I 章から III 章において、ユニテリアニズムの起源とイギリスにおける展開、18 世紀のユニテリアニズムと社会改革、イギリスにおける医療の歴史の中で看護婦がどのような存在として立ち現われてきたのかについて概観してきた。本章ではこれらを踏まえて、『ルース』における「看護と転落した女性の救済」のテーマを考察し、最後にギヤスケルの新たな読みの可能性に言及したい。

『ルース』は、エピグラフとして Mary Magdalen についての短詩を持つことが示すように、罪を犯し転落した女性としてマグダラのマリアに重なるルースがどのように救済され得るのかをテーマにしたものと考えることができる。様々な矛盾が露呈してくる 19 世紀半ばには、18 世紀の急進主義者たちとは異なるかたちで社会改革の必要性が強調され実践されるようになったが、罪ある女性と断罪

された未婚の母をいかに救済するのかもこの改革の緊急なプログラムの一つであり、ギaskellはこの問題を『ルース』においてユニテリアン的な側面から提示したということである。

福音書の中で、イエスに信従し、十字架磔刑を見守り、復活の証人であった女性として描かれているマグダラのマリアは、4世紀以降、「ルカによる福音書7:36-50」にあるイエスの足を涙でぬらし、それを自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った罪深い女と同一視されてゆくようになった。その後、このマグダラのマリアのイメージは、女性の身体性とセクシュアリティの罪を体現する存在として長い歴史を生き延び、女性の chastity が当然のこととされていたヴィクトリア時代には、社会に存在する場所を持たない罪深い売春婦としてのイメージが強固に付与されるようになる。従って、ヴィクトリア時代においては、どのように汚れない精神性を持っていたとしても、未婚の母ルースは存在自体が罪であった。

ギaskellはルースの転落の原因を、階級、ジェンダー、セクシュアリティのすべてにおけるルースと Mr Bellingham との非対称的な関係にあることを示してはいるが、彼女の関心は、未婚でありながら性関係を持ち子供を生んだ転落した罪の女性が、いかにして救済されるのかをキリスト教的枠組みの中で示すことにあるように思われる。そして看護が労働者階級の女性のみが従事する肉体労働から、中流、上流階級の女性も関わるケアへと変わりつつあった時代を生きていたギaskellは、中世の尼僧を原型に持つ清らかな女性像としての看護婦像をルースに担わせることによってこの問題を解決しようとしたといえよう。看護婦は病人のために働くことによって他人の苦しみを救う存在であるが、これはキリスト教的なコンテキストからみると、看護する者は金銭的報酬よりはむしろ精神的報酬を受ける、つまり、看護する者がその行為によって救われることが暗黙の前提とされているということになる。マグダラのマリアが、疲れたイエスに対する心のこもったケアを通して罪を赦されたように、ルースは患者を親身にケアすることにより救われる可能性があるということである。そしてギaskellはユニテリアンとして、看護の仕事が必ずしも救済にはつながらないというカルヴィン主義的ピューリタニズムの枠組みによってではなく、罪を犯した者が他人のために働くことで救済に至ることを強調したのである。

これをよく示しているのが、ルースの世話を引き受けた牧師の Mr Benson である。ルースの正体が明かになった後、彼女を指弾する Mr Bradshaw にベンソンが語る言葉には、小説の中ではディセンターの牧師とされているだけの彼がユニテリアン牧師であることを感じさせる響きが満ちている。ルースのような女性も救済の可能性があること、さらにそれは全面的に神にすがるという形ではなく、“self-redemption”（自己救済）という形で果たされることを強調する彼の言葉には、ユニテリアニズムの個人主義的、人間主義的側面と重なる思想が流れているからである。

‘Is it not time to change some of our ways of thinking and acting? I declare before God, that if I believe in any one human truth, it is this — that to every woman, who, like Ruth, has sinned, should be given a chance of self-redemption — and that such a chance should be given in no supercilious or contemptuous manner, but in the spirit of the holy Christ.’ ... I state my firm belief, that it is God’s will that we should not dare to trample any of His creatures down to the hopeless dust: that it is God’s will that the women who have fallen should be numbered among those who have broken hearts to be bound up, not cast aside as lost beyond recall. (288)

ギャスケルは看護婦の無償の愛とユニテリアニズムの自己救済思想とを結びつけてルースの救済の可能性を示したが、彼女はさらに、ルースが息子 Leonard との強い母子の絆によっても救済される可能性を示した。ギャスケルはルースとレオナルドとの一体感を強調することにより、レオナルドが女性の罪の結果でもあり、同時に女性の救済の契機にもなることを示しているからである。これはギャスケルが子持ちの看護婦をヒロインとすることによって、看護婦という職業に内在する慈愛と母性を強調しているということでもある。

このように看護と母性を結びつけていることは、ギャスケルがヴィクトリア時代のジェンダー・イデオロギーを体現していることに他ならない。従ってそこには、理性において男女の性差は存在せず、女性は医者や政治家になることも可能

だと主張した18世紀のウルストンクラフトやメアリ・ヘイズとは異質の姿勢があるように思われる。しかしウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』において母性重視の考えを示し、ヘイズが『エマ・コートニーの回想録』において、母が息子に宛てた手紙の形式をとって、自分の過去を振り返る物語を書いたり、『偏見の犠牲者』において、母と同じような形で転落してゆくヒロインを描いていることを考えると、急進主義を信奉するユニテリアン女性と、看護婦に象徴される女性の仕事を女性の天性の資質と結び付けているギヤスケルとの間に、共通性を見出すことは困難ではない。

そしてギヤスケルを18世紀のフェミニストたちとのつながりの中で考えることができるのであれば、彼女の年若い友人 Harriet Martineau、Barbara Bodichon Smith、Bessie Rayner Parkes などのラディカルなフェミニストが、ユニテリアンであったりユニテリアンの家庭に生まれていることを切り口にして、ギヤスケルを19世紀のフェミニズムとの関わりにおいて考察することが可能になる。またギヤスケルとユニテリアニズムの問題は、オックスフォード運動とは別の方向から国教会内部の改革運動として現われてくるメソジストや福音主義運動 (evangelicalism) との関わりにおいても考察されなければならないであろう。このようなパースペクティブにギヤスケルを据えることにより、フェミニンな作家ギヤスケルの新たな側面が現われてくる可能性があるのではないだろうか。

注

本稿は2000年10月8日に行われた「日本ギヤスケル協会第12回大会シンポジウム—女性の仕事と自立、ギヤスケルの場合」の発表に基づき、ユニテリアニズムの起源とイギリスにおける展開をふくらませて書き改めたものである。

なお引用したテキストは次の通りである。

Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman* (1972; London: Penguin Books, 1992).

Mary Hays, *Appeal to the Men of Great Britain in Behalf of Women*, eds. Marie Mulvey Roberts and Tamae Mizuta (London: Routledge/Thoemmes Press, 1994).

Elizabeth Gaskell, *Ruth* (London: Penguin Books, 1997).

1. 第1章をまとめるにあたって利用した参考文献は次の通りである。煩雑さを避けるた

め、それぞれの情報に対応する注番号は記していない。2以下も同様に、対応する注番号はつけなかった。William Gibson, *Church, State and Society, 1760-1850* (New York: St. Martin's Press, 1994); George Chryssides, *The Elements of Unitarianism*, (Boston and Melbourne: Element Books Ltd., 1998); Ruth Watts, *Gender, Power and the Unitarians in England 1750-1860* (London and New York: Longman, 1998); Timothy Larsen, *Friends of Religious Equality: Nonconformist Politics in Mid-Victorian England* (Woodbridge: The Boydell Press, 1999); 小嶋潤『イギリス教会史』(1988)、刀水書店、1995; A. リチャードソン/J. ボウデン編、古屋安雄監修/佐藤文雄訳『キリスト教神学事典』教文館、1995; D. クリスティ=マレイ、野村美紀子訳『異端の歴史』教文館、1997; C. S. クリフトン、田中雅志訳『異端事典』三交社、1998; 浜林正夫『イギリス宗教史』(1987)、大月書店、1998。

2. ジョゼフ・ジョンソンとそのグループに関しては、Ruth Wattsと次を参考にしてまとめた。Gerald P. Tyson, *Joseph Johnson: A Liberal Publisher* (Iowa City: University of Iowa Press, 1979).
3. ウルストンクラフトはもとより、メアリ・ヘイズやアナ・バボルドなどのロマン主義時代の女性作家や詩人たちの研究は近年大いに進展しているが、彼女たちをユニテリアニズムと社会改革の系譜の中で考察するものは多くはない。現在のところ最も参考になるのはRuth Wattsである。またこのテーマを男性のロマン主義詩人に関して考察したものにRobert M. Ryan, *The Romantic Reformation: Religious Politics in English Literature 1789-1824* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997)がある。本稿のウルストンクラフトとヘイズに関する部分は、Gerald P. Tysonと次を参考にしてまとめた。Claire Tomalin, *The Life of Mary Wollstonecraft* (1977; London: Penguin Books, 1992); Janet Todd, *Mary Wollstonecraft: A Revolutionary Life* (New York: Columbia University Press, 2000).
4. この看護婦の二つの像には、現実の女性看護婦の労働状況と文学におけるそのイメージとが分かちがたく結びついているのは言うまでもない。女性と看護の歴史、ヴィクトリア時代の看護婦については、次を参考にしてまとめた。Jonathan Barry and Colin Jones eds., *Medicine and Charity Before the Welfare State* (London and New York: Routledge, 1991); Anne Sommers, "Nurses and Ancillaries in the Christian Era," *Western Medicine: An Illustrated History*, ed. Irvine Loudon (Oxford: Oxford University Press, 1997, 139-50); Anne Summers, "Ministering Angles: Victorian Ladies and Nursing Reform," *Victorian Values: Personalities and Perspectives in Nineteenth-Century Society*, ed. Gordon Marsden (London and New York: Longman, 1998, 139-50).

5. この内容は、次を参考にしてまとめた。Charles Webster ed., *Caring for Health: History and Diversity* (Buckingham: The Open University Press, 1995); J. A. ドラン、小野泰博・内尾貞子訳『看護・医療の歴史』誠信書房、1995; ロイ・ポーター、目羅公和訳『イングランド 18 世紀の社会』法政大学出版局、1996。
6. これに関する情報は次のテキストによる。Susan Mumm, *Stolen Daughters, Virgin Mothers: Anglican Sisterhoods in Victorian Britain* (London and New York: Leicester University Press, 1999).